



アフリカ人都市経験の史的考察  
- 初期植民地期ジンバブウェ・ハラ  
レの社会史

吉國恒雄 著

「皆が忘れたことを憶えているのが史学の本分だとするなら、こうした『歴史の終わり』の時代にあつてこそ、アフリカ史学の仕事は沢山あると言ふべきだろう」\* このように喝破する著者にふさわしく、本書は、綿密な資料調査と聞き取りを踏まえた、日々忘却されていくソールズベリーという場を記憶する試みである。ジンバブウェがまだ「ローデシア」と命名もされていなかった19世紀末にフロンティア入植地として建設されたこの町が近代都市ハラレへと着々と変貌を遂げていく過程とは、アフリカ人にとっていかなる経験であったのかという問題意識に貫かれている。本書所収の論文は、1989年以来著者が英語で発表してきた論文を邦訳したものであるが、いずれも具体性をもって語らしむ歴史学という手法の特長を体现したかのような、アフリカの「都市社会史」研究の労作である。

評者にとつてとりわけ印象的だったのは、著者がジンバブウェ大学に提出した博士論文からの抜粋である第1,2章である。そこでは、アフリカ人が町なかに賃借住居を得るようになった結果、白人たちが「近隣」からアフリカ人を排除する動きを起し、それが都市全体に関わる人種別隔離政策の起源となったことや、当時の争議行動が単に労働の場における行動にとどまらず、アフリカ人居住区(ロケーション)での生活世界と社会関係の延長上にあることをめぐる考察が展開されている。そこでの記述は実に臨場感に溢れているが、それはおそらく、質的に異なるいくつかの空間の編成体である都市においては、居住と労働をめぐる問題が、空間相互のせめぎ合いの問題として顕現してくることを、著者がまざまざと描き出していることにあると思える。「空間」あるいは「場」という、形にならないものを再構成する著者のアプローチは、実に刺激的である。(佐藤 章)

\* 吉國恒雄「アフリカを史学する立場 『歴史(あるいは歴史学)の終わり』の奔流の中で」(『アフリカ研究』No.58 2001年)p.39.



アフリカ「発見」  
- 日本におけるアフリカ像の変遷

藤田みどり 著

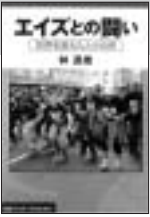
安土桃山時代から、江戸、明治、昭和に至る日本人とアフリカ人との接触、そして日本におけるアフリカ・イメージについて跡づけた本書は、内容の濃い好著である。報告書、小説、絵画、新聞、さらには映画と、多彩かつ豊富な資料に依拠する著者の博識には驚嘆を禁じ得ない。著者は1980年代からこの分野に関する論文を精力的に発表してきたが、本書はその集大成ともいふべき性格を持つ。

宣教師とともに初めてアフリカ人が日本にやってきた時、信長はその肌の色に驚き、着物を脱がせてその場で「洗わせた」。その姿を見ようと群衆が殺到し、死者まで出る騒ぎとなった。信長に仕えた黒人は、本能寺の変でも忠義を尽くして戦ったという。スタンレーの冒険譚がイギリスでベストセラーとなった1890年には、日本でも彼の伝記が出版され、冒険物語ブームが巻き起こった。その影響は宮沢賢治にも及ぶ。

日本人のアフリカに対するイメージは、ある時はヨーロッパ人の偏見に影響され、またある時は自国のナショナリズムの文脈で利用されて、歪んだものになったと著者は指摘する。自分に都合の良い文脈でアフリカ・イメージを創りあげる状況は、今日でもしばしば見られるところである。

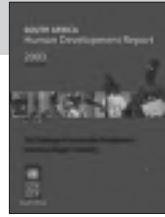
日本におけるアフリカ像の変遷とその批判は本書の主たる論点だが、同時に印象的なのは、本書が丁寧にとどる「日本のなかのアフリカ」の史実である。歴史のなかで我々は、こんなにも多様な形でアフリカと接触していたのだ。その事実は、少なくとも評者にとって大きな驚きだった。アフリカ研究者はいつもアフリカへの無関心を嘆くが、今日の我々の後景には大衆レベルでこれほどの接触と受容の歴史がある。他の地域に比べれば接触の程度は少なかったであろうし、そこでのアフリカ・イメージは、著者が指摘するように歪んだものも多かっただろう。しかし、日本人がアフリカにこれほどの関心を寄せてきた事実は、もっとポジティブに評価していいように思う。

(武内進一)



エイズとの闘い  
- 世界を変えた人々の声

林達雄 著



UNDP, South Africa Human  
Development Report 2003

- The Challenge of Sustainable Development  
in South Africa, Unlocking People's Creativity

途上国のエイズをとりまく状況は、過去5年で劇的に変化した。2000年頃の段階では、エイズ治療薬のおかげで先進国ではエイズによる死亡者が激減したのに対して、薬の費用や医療技術の問題のために、途上国ではエイズ治療は無理というのが常識であった。それが現在では、途上国においても予防・啓発などと並んで治療がエイズ対策の重要な要素であることが広く認識され、世界保健機関（WHO）など国際機関のイニシアチブのもと、途上国でのエイズ治療普及への取り組みがなされている。サブサハラ・アフリカでエイズ治療を受けている人の数は、2005年半ばまでに約50万人にまで増加した。まだ治療を必要としている感染者の1割程度にしか届いていない計算になるが、それでも治療が本格的に始まったことは、アフリカ諸国の感染者やその家族に大きな希望を与えることになった。

この数年の間に何が起きたのか。無理と言われた途上国のエイズ治療を実現した原動力は何だったのか。医師でありNGO活動家である著者は、2000年以降、ケニア、南アフリカ、ブラジル、タイなど世界中を飛び回り、多くのHIV感染者と出会い、数々の国際会議にも関わって、この間の変化を間近に観察してきた。そのエッセンスがこのブックレットに凝縮されている。世界貿易機関（WTO）のもとでの知的所有権の保護強化が途上国のエイズ治療にとって大きな障害となったこと。途上国の感染者自身がその壁を崩すために立ち上がり、世界的な支援の輪も広がったこと。その結果、公衆衛生保護のためには医薬品の知的所有権が制限されうるといふ原則がWTOで認められたこと。決して簡単な内容ではないのだが、本書は平易な文体で貫かれており、とかく難しくなりがちな知的所有権については、「特許さん」を主人公とする寸劇を通して感覚的に理解できる工夫がなされている。

小さなブックレットだけに、論点や課題が網羅されているわけではない。しかし、途上国のエイズについて、まず何から読み始めればいいのか、と問われれば、私は真っ先にこの一冊を推薦したい。（牧野久美子）

東京 岩波書店 岩波ブックレットNo.654 2005年 62p.

国連開発計画（UNDP）の『人間開発報告書』には各国・地域固有の問題に焦点を当てた地域レポートも作成されている。本書は南アフリカの重要課題に焦点を当てた地域版『人間開発報告書』の一つである。

本書の問題意識は2002年の「持続的発展に関する世界サミット」の成果を踏まえて、南アフリカの持続的発展と人間開発の課題を分析することである。本書によれば、アパルトヘイト体制、それによる経済社会政策は国民多数の生活水準を改善することができず、持続可能でもなかった。このような現状認識に従って、本書はアマルティア・センの「ケイパビリティ」すなわち、人々が自ら望む生き方を実現する機会に注目し、財・サービスが人々のケイパビリティをどのように促進するのか、という問題を考察している。

最初の部分では、地域あるいは社会集団別の人間開発指数を作成し、地域間、さらにはアフリカ系と白人の間で人間開発指数の格差があることを報告している。また「社会サービス欠乏指数」（Service deprivation index）を作成し、基礎的サービス供給の進捗状況を明らかにしている。このような基本的な生活能力の不平等の背景には、所得分配の不平等と雇用機会の不足があることが本書では強調されている。第4章では周辺の地域に基礎的サービスへのアクセスを作る上での非営利組織の役割、第5章では1994年以降の政策の概念的妥当性・資金的コミットメント・戦略を再検討している。第6章では環境問題、不平等、経済発展の複雑な連関が考察されている。第7章では持続的発展と労働市場の関係を分析し、必要な政策課題を考察している。第8章では失業や不平等、貧困を削減し、環境的持続可能性やマクロ経済バランスを改善できるような分析枠組みを考察している。本書を読むことによって、「人間開発」という包括的な開発理念を一国の具体的な開発政策に反映させていく手がかりを得ることができるだろう。

（野上裕生）

Cape Town : Oxford University Press, 2003, xxii+294p.



## アフリカ自然学

水野一晴 編

アフリカの自然をテーマとする映像が一般大衆の関心を掘り起こしている意味は大きい。しかしながら、そのような一般向けの情報は書誌となるとナショナルジオグラフィック誌など一部に限られている。アフリカにも存在する氷河や高山植物、それから砂漠化の状況、そして人々の自然と一体化した生活などをもっと知りたい、読みたいと思う者は多いであろう。アフリカに通い続ける開発援助関係者であっても、サバンナの景観が地域によってなぜこのように異なるのか、年によって川の流量が変化しているのはなぜかといった景観からみた疑問は持ち続けているものである。

そのような一般の疑問を解決してくれるのが本書であろう。執筆者は、4年間の科学研究費プロジェクトのメンバー14名で、その専門は自然地理学を中心に、土壌学、生態学、人類学など多岐にわたる。Ⅱ部構成で、第Ⅰ部はアフリカの自然に関する概説(地形、気候、植生、土壌、環境変動、リモートセンシング)。第Ⅱ部は各テーマに共通のアプローチを3段論法で設定し、着眼点、その不思議さの解明、結果をどうアピールすべきかをテンポ良く説明しており、読みやすい。16のテーマはさらに自然と環境変化、自然と地域性、自然の個性とそのとらえ方、自然と人の営みの4節に分けられており、多くの部分は、高校の地学の知識があればわかるように説明されている。多用されている地図、図表、写真はモノクロ表現の無限の可能性さえ感じさせる労作である。

また、各所で開発を阻害する要因の多くが自然環境に由来していることが明解されていて、はっとする。例えば人口希薄な理由が、遊牧生活に広い面積が必要とか、降水量に比した貧栄養の砂質土壌の卓越、鉄の硬盤層が露出したために耕作が困難である等。逆に大湖地方やナイジェリアなどの高密度地域では、火山噴出物や火山灰の海底堆積物に由来するといった具合である。アフリカとその開発を考える者にとって、人文現象の背景にある自然条件の重要性を再考する一冊でもある。(吉田栄一)

東京 古今書院 2005年 257p.

開発途上国の政治的リーダーたち  
- 祖国の建設と再建に挑んだ14人

石井貴太郎 編著

まず本書の帯、「開発途上国の英雄列伝」というフレーズに驚かされる。終章に至れば、これが作家・海音寺潮五郎の著作『武将列伝』にちなむ、編者年来のテーマと知れるが、手に取った読者の側では、開発途上国における英雄とは誰かという疑問が頭をもたげる。

本書が取り上げているのは、アジア、ラテンアメリカ、アフリカ諸国の建国や国家中興の局面で決定的な役割を果たし、いわゆる「英雄的な評価」を得ている政治的リーダー14名である。アフリカ編ではナセル、ンクルマ、マンデラの3名にそれぞれ1章が割かれ、生い立ちから政治的経歴、国家指導者として果たした役割をレビューし、それらの評価にも言及している。

「ガマル・アブデル・ナセル アラブとエジプトの狭間で」(吉川卓郎)は、ナセルを「ライオン」に例え、「アラブ民族主義」の大義の下、革命を経て急進的政策を推進した「自由なライオン」がアラブ世界全体の問題に取り込まれ「とらわれのライオン」となる道筋を跡付け、「傷ついたライオン」として締め括る。

「クワメ・ンクルマ パン・アフリカ運動の盟主を目指して」(岩田拓夫)は、ガーナ独立期にンクルマが主導した社会主義共和国の建設と、パン・アフリカ主義に基づくアフリカ統一の動きについて、その進展と停滞をンクルマ自身の、政治家としての軌跡における「光と影」というコントラストで描き出している。

「ネルソン・マンデラ アパルトヘイト廃絶のために」(下平拓哉)は、アパルトヘイト体制の成立と崩壊、さらに民主体制への転換という過程を、マンデラ自身の「成熟した政治的人間として行動するスタイル」の形成、プラグマティストとしての思想と行動の展開に重ねて描き出そうとしている。

アフリカ諸国の事例に即してみれば、終章に言及されるような「悪役的な評価」を得ている政治的リーダーが少なくない。海音寺の著作で言えば『悪人列伝』シリーズが充実するであろう。図らずも「悪役」を演じた指導者たちを、それぞれの時代状況を映す存在として問い直す試みも必要かもしれない。(望月克哉)

京都 ミネルヴァ書房 2005年 xii+346p.



## ゴリラ

山極寿一 著

端的なタイトルに好奇心を抱く人も少なくないだろう。本書ではゴリラの生態のみならず、先行研究も多数紹介されている。そのため本書を読破するだけで、ゴリラ研究におけるホット 이슈や今後の課題を知ることができ、非常におもしろい。

第1章から第5章までは、ゴリラの生態について書かれており、その食生活や環境、集団構造等が紹介されている。ゴリラの世界は人間の世界によく似た面もあり、ゴリラの一つひとつの行動の理由付けを知るにつれ、思わず自分の行動を振り返り、自分とゴリラの行動を比較したくなる。動物学者である著者は、「ゴリラの生き方に人間の由来や未来を見出しゴリラ研究に没頭する」と書いているが、読み進めるにつれその著者の気持ちに共感できるようになる。続く第6章では、ゴリラとチンパンジーの違いが紹介されている。この二つの類人猿は、採食競争を避けるように生態的特徴を分化させ、その違いに対応した社会的特徴を発達させてきたと言う。

第7章では第6章までとは視点が変わり、地域住民とゴリラの関係性を指摘している。本章では、共存というタイトルの下、野生ゴリラの現状と保護対策について述べられている。これまでゴリラが多数生息していると見込まれていたのはガボン、コンゴ共和国、コンゴ民主共和国であるが、急増する密猟や内戦、そして人間からの病気の感染によってその頭数が激減してきていると言う。そのため政府や大学、NGOなどが野生のゴリラを保護する活動を行っている。また近年、エコ・ツーリズムも推進されてきている。こうした活動は、地元住民の支持なくしては成り立たないと言う。著者は、類人猿の生存しやすい環境を残すことはその生態系の適切な保全につながり、人類とは異なる自然の見方や利用法を学ぶことで、環境問題に役立てていくこともできると述べている。

本書は、ゴリラに関する知識を得ると同時に、環境問題や人間の行動、農村社会といった事柄を考えるきっかけを与えてくれる一冊である。 (原島 梓)

東京 東京大学出版会 2005年 227+28p.(参考文献)



## アフリカのひと - 父の肖像

ジャン・マリー・ギュスターヴ ル・クレジオ  
菅野昭正 訳

1948年に当時8歳のル・クレジオ少年は、家族とともに、西ナイジェリアへ向かった。そこで少年は、戦時下の閉塞的な日々を埋め合わせるかのように自然を謳歌する一方、怒りっぽく厳格謹厳な、まるで見知らぬ男であるかのような父に出会う。生地モーリシャスを離れ、イギリスで医学を修めたル・クレジオ父は、イギリスを見限って熱帯医療に身を投じ、軍医として南米ギアナ、次いでカメルーンの国境部に近いナイジェリアにわたった。しかし、住民医療への熱情とル・クレジオ母との愛に満ちた生活は大戦を境に一変し、植民地行政への怒り、果てしない病者の群れ、熱帯の辺地での孤独と激務によって、幻滅へと変わっていった。そして晩年は、ピアフラ戦争、独裁者、アパルトヘイトなど相次ぐアフリカ発の凶報に心うちひしがれながら、この世を去る。

熱帯アフリカでの解放と威圧の日々に関する少年時代の記憶をたどりつつ、小説家ル・クレジオは、いかに父が「アフリカのひと」となり、かく生きざるを得なかったかを、称賛と哀切を込めて描きだしている。そこにはノスタルジーもエキゾチズムもなく、全編に痛切な感情が漂う。濃密な植民地経験を生きたル・クレジオ父の肖像は、20世紀の縮図とも読める。

本書原題は*L'Africain*という。このフランス語の表現は、アフリカ通である非アフリカ人に用いられるもので、アフリカの国家元首との人脈を介して政治を牛耳るフランスの政治家に対してよく使われる(代表的な用例はミッテランとフォカールに対してのものである)。表題には、こういった植民地主義的、父権主義的な態度への投げ返しの意図も込められているのであろう。むろん、本書は下世話な告発調とは無縁で、世評高い小説家ならではの文体に(すばらしい訳業ともあいまって)貫かれた美しい文学作品である。ただ、アフリカ研究者にとっては「ポスト・コロニアリズム」に関するひとつの深刻な意見表明として読むことが期待されているといえるかもしれない。

(佐藤 章)

東京 集英社 2006年 176p.